

富山高専と富山文学の会

近藤 周吾

「高専」の略称で親しまれてきた高等専門学校（歴史も、すでに半世紀を越えたが、数が少なく、大方には依然、秘密のヴェールに包まれているのではないだろうか）

かくいう私自身も赴任する以前は高専のことを詳らかにし得なかった。だから、高専のことがよくわからないという人がいても不思議に思わない。むしろ当事者として高専のことを外部に説明する責任があると痛感する。

というわけで、以下、高専、とりわけ富山高専と富山文学の会の関係について、公私緬い交ぜになることを厭わず、何かしら草しておこう。

高専は五年一貫教育を特色とする、知る人ぞ知る学校で、社会的評価は高い。海外でも Social Doctor としての役割に注目を集める。五年一貫教育と言ったが、全国に五つしかない商船学科の場合は、五年半で卒業する。九月卒業、十月就職という国際的なスタイルは先端を行く。さらに専攻科へ進むと、学士の学位が取得できる。専攻

科生は七年（七年半）にわたり、高専生活を過ごすから、高校と大学（学部）が一体となった学校だ。かつての旧制高校をイメージするとわかりやすい。

ただし、高専は高等教育機関であり、一五歳からカレッジライフが始まる。教育委員会の管轄でも、学習指導要領があるわけでもないのが、高校というより、短大や大学に近い。商船学科は文部科学省だけでなく、国土交通省の管轄でもある。教員も教員免許のない者が多数派だが、その代わり、大学のように博士が揃う。

全国の高専の中でも、富山高専はひととき異彩を放つ。旧富山工業高専（現在の本郷キャンパス）と旧富山商船高専（現在の射水キャンパス）が高度化再編し成立した高専だからである。統合高専はスーパー高専と呼ばれ、規模が大きい。富山高専の他、仙台高専、香川高専、熊本高専がスーパー高専だが、富山高専がユニークなのは、そのダイバーシティにある。高専といえは、工業高専で男子が多いというのが定説で一般的なイメージだろう。

ところが、富山高専の場合、機械システム工学科、電気制御工学科、物質化学工学科、電子情報工学科という工学系はもちろん、国際ビジネス学科、商船学科という学

科も擁し、バラエティに富む。日本一、女子学生が多く、規模、多様性の点では他校のステレオタイプに当てはまらない、異色な高専なのである。

就職・進学率がほぼ一〇〇%の学生はもちろん、教員の能力も総じて高く、研究者の実力を測る指標である科研究の取得状況を見ても、全国で一、二位を争う。しかも、富山県は高等教育機関が極端に少ない県である。富山高専が地域で果たす役割は大きい。国語科の教員として例外ではなく、地域の要請と無縁ではない。

富山高専の国語科には、教授二名、准教授二名、非常勤講師若干名がいる。近代文学専攻の教員は、高熊哲也、近藤周吾、黒崎真美の三名。そしてこの三名が偶然とはいえ、そのまま富山文学の会の代表・副代表・事務局長であることを考え合わせると——半ば偶然の産物に過ぎず、一部で不満があるかもしれないが——高専が富山文学の会の屋台骨を支えてきた事実が明るみになる。いや、もちろん、富山大学の金子幸代先生を筆頭に、西田谷洋先生、水野真理子先生、小谷瑛輔先生(現在は明治大学)、金沢大学の丸山珪一先生、聖徳大学の八木光昭先生(現在は定年)ら、錚々たる大学の名誉教授、教授、准教授

の足下には遠く及ばないことは自明である。この会が会場も含め、富山大学を中心に回ってきたという事実をねじ曲げる意図はなく、謝意を表したい。しかし、それはそれとして、高専がまがいなりにも一貫してこの会の設立・運営・研究を縁の下の力持ちとして努め、果たしてきたという事実は、ことが文学だけに、全国的にも稀有な例と言える。少しだけ強調しておく次第である。

旧富山商船高専に私が赴任すると、富山文学の会が設立された。だから、富山文学の会の十周年は、私の富山・高専・結婚の十周年とも軌を一にする。一般に「創業守成」は「創業」より「守成」が難しい。結婚と同じと考えれば、合点もいく。よって「成人式」や「銀婚式」などは夢のまた夢だが、健康に気をつけ、また一歩ずつ、皆様と協力しながら歩んでいけたらと希う。私は富山の前は北海道、その前は熊本にいた。北海道や熊本には『位置』『方位』という批評誌があり、かつて私はこの両誌に心から焦がれ、羨望したものだ。今はまだ小ぶり、朴訥で、ぶつきらばう、愛想はなく、目立とうともしない、いかにも富山らしい『群峰』だが、いずれはその名にし負う連峰に育ち、新しい世代に届くまで成長してほしいと庶幾してやまない。